



6:1 私が日の下で見た悪しきことがある。それは人の上に重くのしかかる。
6:2 神が富と財と誉れを与え、望むもので何一つ欠けることがない人がいる。しかし神は、この人がそれを楽しむことを許さず、見ず知らずの人がそれを楽しむようにされる。これは空しいこと、それは悪しき病だ。
6:3 もし人が百人の子どもを持ち、多くの年月を生き、彼の年が多くなっても、彼が良き物に満足することなく、墓にも葬られなかったなら、私は言う。彼よりも死産の子のほうがまだと。
6:4 その子は空しさの中に生まれて来て、闇の中に去って行き、その名は闇におおわれ、
6:5 日の光も見ず、何も知らない。しかし、この子のほうが彼よりは安らかだ。
6:6 彼が千年の倍も生きても、幸せな目にあわなければ。両者とも同じ所に行くではないか。
6:7 人の労苦はみな、自分の口のためである。しかし、その食欲は決して満たされない。
6:8 知恵のある者は、愚かな者より何がまさっているだろう。人の前でどう生きるかを知っている貧しい人も、何がまさっているだろうか。
6:9 目が見ることは、欲望のひとり歩きにまさる。これもまた空しく、風を追うようなものだ。
6:10 存在するようになったものは、すでにその名がつけられ、それが人間であることも知られている。その人は、自分より力のある者と言いつ争うことはできない。
6:11 多く語れば、それだけ空しさを増す。そ

れは、人にとって何の益になるだろうか。
6:12 だれが知るだろうか。影のように過ぐす、空しい人生において、何が人のために良いことなのかを。だれが人に告げることができるだろうか。その人の後に、日の下で何が起るかを。

神がないなら、また神を人生の基礎に据えないなら、すべてはむなししいということを経験者は語り続けます。「富と財宝もそうですし、「百人の子ども」、「多くの年月を生きる」ことも同じです。

また人はどんに希望がかなっても、「その(食)欲は満たされない」のですから、いつまでも満ち足りた幸福を味わうことはないのです。

もちろん、人間はそこまで神なしの人生観を追求することはできません。むなしさの中で絶望するしかないのです、それ以上は考えないようにしましょう。または何か生きがいを見つけてしょう。しかし、それらは根拠がないので、苦しみや事故など想定外の出来事で、そして死を前にして崩れてしまいます。

そこで伝道者は人々が薄々気づいている神という存在を指し示します。「だれが人に告げることができようか。」と、神の存在に思いが向くように導いているのです。クリスチャンである私たちも、人生の希望は願い、また計画を追求する前に神様のみことろと目的をしっかりとさせることが必要です。そうでないと、その努力が「やみの中に消される」ことになってしまいます。

①神のみことろは？(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか？(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか？(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか)

④この世にあって何を実践しますか？

